

## 幼稚園教諭の意識構造における乖離

— ジェンダー概念を手がかりにして —

田中 亨胤 佐藤 和順

(兵庫教育大学)

本研究は、幼稚園の教諭はセクシズムにどの程度問題意識を有しているのか、どの程度ジェンダーとセクシャリティーの概念を正しく把握しているのかを明らかにすることにより、セクシズム解消の方向性を打ち出すことを目的とする。調査の結果、セクシズムを肯定する教師はいないが、ジェンダーとセクシャリティーの概念規定が明確になされていないため、何をセクシズム解消のために、行わなければならないのか、この点が教師に理解されていないのではないかと考えられる。保育者の教育観としての児童中心主義のイデオロギーと、教育方法上のストラテジーという、そもそも相容れない要請を統合するためにジェンダーは用いられているのである。今後はジェンダーとセクシャリティーの概念規定を明確にもち、セクシズム的な隠れたカリキュラムを顕在化させることができるリテラシーを持った人材の養成が必要となると考えられる。

キーワード：ジェンダー、幼稚園、幼稚園教諭、児童中心主義

田中 亨胤：兵庫教育大学・幼年教育講座・教授，〒673-1494 兵庫県加東郡社町下久米942-1

E-mail : tanakayu@edu.hyogo-u.ac.jp

佐藤 和順：兵庫教育大学・大学院連合学校教育学研究科・大学院生，〒673-1494 兵庫県加東郡社町下久米 942-1-10-504,

E-mail : wajun@mri.biglobe.ne.jp

## Estrangement in the Consciousness-Structure of Kindergarten Teachers : As a Clue of the Gender Concept

Yukitane Tanaka and Kazuyuki Sato

(Hyogo University of Teacher Education)

The purpose of this research is to clarify how much awareness of the issues kindergarten teachers have in terms of sexism, and to clarify whether they grasp the concepts of gender and sexuality or not. The result of the survey shows that no teachers affirm sexism. But they have no clear concepts of gender and sexuality in them. Therefore, it does not seem that kindergarten teachers really know what they should do for resolving sexism. Gender is used for uniting the ideology of "principle of childcentered education" with a strategy as an educational method, though both of two factors are unacceptable each other at a time. We will need to educate a talented person who has a clear concept of gender and sexuality, and who can make a hidden curriculum obvious with literacy.

Key Words: gender, kindergarten, kindergarten teacher, principle of childcentered education

Yukitane Tanaka is a Professor of Hyogo University of Teacher Education, 942-1, Simokume, Yashiro-cho, Kato-Gun, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail : tanakayu@edu.hyogo-u.ac.jp

Kazuyuki Sato is a Student of Joint Graduate School (Ph.D. Program) in the Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1-10-504, Simokume, Yashiro-cho, Kato-Gun, Hyogo 673-1494 Japan., E-mail : wajun@mri.biglobe.ne.jp

## I 問題の所在

幼児期の教育は人間形成の基盤を培うものであり、教師の担う役割はきわめて重要である。教師は主体的な活動を通して幼児一人一人が着実な発達を遂げていくために、理解者としての役割、協同作業者としての役割、モデリングの対象としての役割、援助者としての役割等を果たさなくてはならない<sup>(1)</sup>。そのような多種多様な役割を果たさなくてはならない教師に共通する、イデオロギーの理想とはどのようなものであろうか。最近の幼児教育を代表するキーワードに児童中心主義がある。現代の幼児教育はいわゆる児童中心主義の思想を基調にして展開されている。

現行の『幼稚園教育要領』(平成10年)においても一人一人の発達の特性に応じた児童中心的な指導・援助の必要性が説かれている。幼児の発達の姿は、巨視的にみるとどの幼児も共通した過程をたどると考えられる。幼児を指導する際に、教師がその年齢の多くの幼児が占める発達の姿を心得ておくことは、指導の仕方を大きく誤らないためには必要である。しかし、それぞれ独自の存在として幼児一人一人に目を向けると、その発達は一樣ではないことが分かる。幼児は、一人一人の家庭環境や生活経験も異なっている。それゆえ、一人一人の人や事物へのかかわり方、環境からの刺激の受けとめ方が異なってくる。すなわち幼児は、その幼児らしい仕方環境に興味を持ち、環境にかかわり、何らかの思いを実現し、発達するために必要な色々な体験をしているのである。幼児のしようとしている行動が、幼児の発達の姿からは好ましく思えないこともある。しかしその行動をとり、その行動を通して実現しようとしていることが、その幼児の発達にとって大事である場合が、一方では多々ある。それゆえに、教師と幼児が自ら主体的に環境とかかわり、自分の世界を広げていく過程そのものを発達と捉え、幼児一人一人の発達の特性を理解し、その特性やその幼児が抱えている発達の課題に応じた指導をすることが大切である、とするのが児童中心主義の立場である<sup>(2)</sup>。

昨今の教育現場での諸問題を概観する時、この児童中心主義の考え方が実践されていないゆえに起こると考えられる問題も生じてきている。学校におけるセクシズム(性差別)やジェンダーの再生産もその一つであると考えられる。

1970年代以降、学校におけるセクシズムを論ずる時、ジェンダーの再生産に着目した研究が多くなされてきた<sup>(3)</sup>。学校教育が、ジェンダー形成・再生産に何らかの関わりを有している事は明確である。セクシズム的な隠れたカリキュラムが今日のセクシズムの大きな要因の一つであり、それはささやかでなげない実践の積み重ねによって構成されているのである。そしてささやかでなげない実践の積み重ねが、児童中心主義と矛盾することがあるのではないかと考えられる。

具体的には、幼稚園において保育の場で実践的に用いている性別カテゴリーの使用が、男女平等主義を前提とする児童中心主義と矛盾する可能性を有しているのではないかという仮説が生じてくるのである。その矛盾は、教師にも子どもにも保護者にも、ほとんどの場合見えない、見えにくいものであった。それを見えるようにしていく問題意識が男女平等教育を推進しようとする今後の学校現場に必要なとなる。セクシズムに関する意識の高揚と、ジェンダー概念のゆがみのない把握が、今後のジェンダー・センシティブな教育に不可欠であると考えられる。

## II 研究の目的

本研究は、幼稚園の教師はジェンダーやセクシャリティの概念をどのように把握しているのかということ、性役割観との関連に着目しながら明らかにしていくものである。性役割観は「男は仕事、女は家庭」的な性による役割規範の違いに注目をするものである。そして、それを尺度化することは、単に性差による社会的行動のあり方の違いを表出させるだけでなく、保育における教育実践のイデオロギーとしても捉えることが可能になる。

具体的には子どもの性差によって、教師は指導方法を変えるのか。男女別の整列の方法をどのように考えているのか。教師の性役割観の違いが、教師の性別による指導方法の変化、男女別の整列の方法の認識といかなる関係にあるのかを明らかにする。

そこから男女平等を前提とする児童中心主義という理想と、保育の実際には大きな隔たりがあり、教師の意識の中に、児童中心主義と教室運営の為の意識との間に乖離が存在するということがいえるのではないかと考える。幼稚園教師の教育観としての児童中心主義と教育方法上のストラテジーという、そもそも相容れない要請を統合するためにジェンダーが用いられているということを明らかにするものである。

このような研究態度は、ジェンダー再生産に関わる表層構造と深層構造との関連を捉えるものであり、教育実践の改善にも有用であると考えられる。教師の保育中の意識は、制度化された自明の理としてのイデオロギーであったり、潜在化された無意識のイデオロギーであったりする。こうした教師のイデオロギーが、その他の教育実践同様、どのようにジェンダーの再生産に影響を及ぼしているかを明確にすることが教育実践において大きな意味を有すると考えるものである。

## III 研究の方法

対象：広島県内の学校法人立の幼稚園教諭

(11園・137名)

方法：質問紙調査

時期：2001年5月下旬～6月上旬

表1：質問紙の配布と回収の状況

調査状況	対象園	A園	B園	C園	D園	E園	F園	G園	H園	I園	J園	K園	合計
配布数		18	8	12	7	13	16	8	15	10	27	14	147
回収数		18	8	12	7	11	14	8	13	10	22	14	137
回収率 (%)		100	100	100	100	84.6	87.5	100	86.7	100	81.5	100	93.2

配布と回収の状況：表1

#### IV 調査の結果と分析

今回の調査においては質問紙調査の回答をもとに、教師の属性や教育観、保育方法等を数量化した。本来ならば二つ以上の項目の関連性を問題にする場合は、適切な統計の手法を用い独立性の検定を行わなければならない。しかし、サンプル数が少ないことと、期待度数が5未満のセルも存在することから、信頼性に問題が生じるので本稿ではクロス表に留めるものである。

##### 1) 回答者の属性

回答者の属性については以下の通りである（表中の単位は%、（ ）内は人数。以下同じ）。回答者の性別については表2に示す通りである。幼稚園教師に占める割合と同じく、女性の回答者が94.2%と圧倒的多数である。

表2：性別

男性	女性	合計
5.8(8)	94.2(129)	100.0(137)

年齢に関しては20歳代が54.1%と過半数を超えている。それに伴い保育年数も5年未満のものが47.5%と約半数を占めている。保育年数が20年以上25年未満を除き、年齢と保育年数は高いほど、長いほどその全体に占める割合は小さくなっている（表3・4）。このことは、年齢と保育年数が正比例的な関係にあることから容易に理解されることである。

表3：年齢

20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
54.1(74)	17.5(24)	13.1(18)	10.9(15)	4.4(6)	100.0(137)

表4：保育年数

5年未満	10年未満	15年未満	20年未満	25年未満	30年未満	30年以上	合計
47.5(65)	23.4(32)	7.3(10)	4.4(6)	10.2(14)	3.6(5)	3.6(5)	100.0(137)

※5年未満：新任～4年 15年未満：10～14年 25年未満：20～24年 30年以上：30年以上  
10年未満：5～9年 20年未満：15～19年 30年未満：25～29年

##### 2) 教師の意識

現行の『幼稚園教育要領』においても一人一人の発達の特性に応じた指導の必要性が説かれていることから分かるように、ここ数年来保育の場において、子どもの個性を尊重し、子ども本位の保育を展開するという児童中心主義の考え方が教師にも浸透してきていると考えら

れる。児童中心主義は教師の間で自明化されているのである。幼稚園における男女差のしつけ等は、フォーマルにもインフォーマルにも教育目標にはされておらず、その意味においては子どもの性に関係なく保育は展開されるべきであり、教師もそのことを理想であると考えている<sup>(4)</sup>。そこで「保育中、男の子と女の子で接し方を変えることがありますか」という質問を実施した。その結果は表5に示すとおりである。

62.8%が「男の子」と「女の子」という性差により、保育中の子どもへの関わり方を変えることはないと答えている。このことは性という属性に関わりなく、子ども本位に保育を展開している教師の児童中心主義の現れであると捉えることができる。

表5：「保育中、男の子と女の子で接し方を変えることがありますか」

ある	ない	合計
37.2(51)	62.8(86)	100.0(137)

児童中心主義のイデオロギーを有していても、男と女という生物学上の性差は存在するのであり、性差に関する認識を教師はどのようにもっているかということを確認するために『「男の子らしさ」「女の子らしさ」というものがあると思いますか』という質問を行った。その結果は表6に示すとおりである。

表6：『「男の子らしさ」「女の子らしさ」というものがあると思いますか』

ある	ない	合計
81.0(111)	19.0(26)	100.0(137)

81.0%の教師が「男の子らしさ」「女の子らしさ」というものがあると考えているようである。しかし、その「男の子らしさ」「女の子らしさ」は生物学的な根拠に基づくものか、それともそれ以外の文化的・社会的な根拠によるものなのであろうか。

『あなたの思う「男の子らしさ」「女の子らしさ」とは何ですか』という質問に対して回答のあった「男の子らしさ」「女の子らしさ」と思われる代表的もの、男女による相違点を以下に示す。

##### 【男の子らしさ】

力強い・活発・力持ち・弱音ををはかない・声大きい・忍耐強い・さっぱりしている・大雑把

##### 【女の子らしさ】

優しい・他の人を思いやる・線が細い・母性的な優しさ・年少児の面倒をよく見る・細やかである

## 【その他】

- ・アニメなどの好みも違うし、遊びも違っている
- ・言葉遣いや服装の違い
- ・体力面・精神面の違い
- ・興味や自己表現をする際の表現法の違い

以上のような男女による違いは、性差のいかなるレベルにその根拠をおくものであろうか。現在、人間社会で見られる性差は、色々な段階に区別できると考えられている。大別すると三つに分けられる。第一は、生物学的差異から必然的に発生するものである。いわゆるセックス (sex) と呼ばれる生物学的な雌雄の区別である。男性は妊娠させ、女性は月経があり、妊娠し、授乳するという生殖にかかわる四つの基本的差異に基づくものである。第二には生物学的差異を基盤とするが、必ずしも必然的ではないものである。例えば、女性が育児を分担するという事は、出産という女性の生物学的機能に基盤をもっている。さらに、育児中、女性は家にいなければならず、外での労働は困難であるから、家事も女性の分担となりやすい。しかし育児は女性にしかできないわけではなく、男性にもできることであり、両者の間に必然的関係があるとはいえない。そして第三には、生物学的差異とは無関係な文化的・社会的なものである。例えば、男女の服装や髪型、言葉遣い、「男性」「女性」にふさわしいとされている知的活動や職業上の違い等が、これにあたりと考えられる。

以上の三つの境界は歴史的・社会的条件によって変化する。特に第二の範疇に含まれる性差は、生物学的な性差との関連が著しく弱まり、第三の範疇の性差に接近していると考えられている。母乳に代わる人工乳の出現や家事労働の省力化により、必ずしも育児・家事のために女性が家にいることが必要でなくなったからである。今日、人間社会で日常的に観察される性差の大部分は第三の範疇にあてはまるものである<sup>(5)</sup>。本研究においては、第一の範疇をセクシャリティと定義し、第二・第三の範疇の性差をジェンダーとして扱うものである。

前述のような「男の子らしさ」「女の子らしさ」は生物学的な違いによるものというより、文化的・社会的なイメージによるものではないかと考えられる。つまりセクシャリティによるものではなく、ジェンダーに基づくものではないかと考えられるのである。

そこで教師がセクシャリティとジェンダーの違いを、いかに理解しているかを明らかにするために以下の設問による質問を行った。「セクシャリティという言葉を知っていますか」「ジェンダーという言葉を知っていますか」の二つの設問である。その回答は表7・8に示す通りである。

81.0%の教師がセクシャリティという概念を知っていると回答している。教師は、セックスの概念をこ

表7:「セクシャリティという言葉を知っていますか」

ある	ない	合計
81.0(111)	19.0(26)	100.0(137)

表8:「ジェンダーという言葉を知っていますか」

ある	ない	合計
47.4(65)	52.6(72)	100.0(137)

のセクシャリティに重ね合わせているようで、生物学的な性差としてこれをとらえているのではないかと考えられる。これに対してジェンダーという概念に関しては、47.4%のものが知っていると回答している。明らかにセクシャリティと比べると認識が低い。またセクシャリティとジェンダーの概念の相違が明確であることを確認するために、「ジェンダーの意味を説明してください」という質問を行った。

表9:「ジェンダーの意味を説明してください」

正しく理解	間違っ理解	わからない	合計
5.9(8)	8.8(12)	85.3(117)	100.0(137)

ジェンダーの概念を正しく理解している教師は5.9%である。間違っ理解している教師は8.8%、わからないという回答は、94.1%となる。間違っ理解していると思われる具体的な回答を以下に挙げる。

## 【間違っ理解していると思われる回答】

- ・様々なものを男性的・女性的なものに分類する時の枠組み (20代・女性)
- ・性差 (60代・女性)
- ・性格的な男らしさ・女らしさ (40代・女性)
- ・男性と女性の性の区別 (20代・女性)

間違っ理解していると思われるものは、ほとんどがセクシャリティとの違いが明確になっていないものであると考えられる。このことから教師達は、漠然と性の違いというものを認識してはいるが、それはセクシャリティを基盤とするものであり、ジェンダーとセクシャリティの明確な概念規定を伴っていないことがうかがえる。これは性の違いというものが、あまりにも自明であり、あえて概念規定しなくとも自らの生活、幼稚園という教育の場においては、保育に何らの支障も与えないからではないだろうか。性差のあたりまえさにこそ、セクシズムに対する問題意識の認識不足の原因が内在していると思われる。確かに、ジェンダーとセクシャリティというものは不可分に、密接な重なり合いを有している。どこまでジェンダーの範疇であり、どこからがセクシャリティの範疇であるかを明確にするのは困難である。又、その必要があるかという点も検討を要すると思われる。ジェンダーとセクシャリティの違いが、必ずしも実質的に区

別されていないことにセクシズムの一要因をみることができる。

このことに関連して、セクシズムに関する教師の認識を確認するため「今の社会に性差別はあると思いますか」という設問による質問を行った。

表10:「今の社会に性差別はあると思いますか」

ある	ない	合計
79.6(109)	20.4(28)	100.0(137)

現在の社会には性差別が存在していると79.6%が感じている。しかし「性差別がある」と回答した教師であっても、性差別の内容に関しては「なんとなくあると思う」とか「残念ながらあるのではないか」というように明確な問題意識は低いようである。一方、セクシズムはない、と答えた教師の中にも「幼稚園では圧倒的に女性が多いので特に感じない」的な教師の性別構成比に関わる回答を寄せるものもあった。

また「あなたの保育は性差別解消のために役立っていると思いますか」という問いに対しては76.0%の教師が「特に役立っているとは思わない」と回答している。「具体的に、すぐにどうこうということはないと思いますが、自分の受け持った子どもが将来差別をしないような人間に育ててくれたらいいなという思いはあります」という回答に象徴されるように、セクシズムを否定はするが実践的には特に何も行ってないという教師の意見が目立った。教師はセクシズムに対しては、問題意識を有しているが、大半の教師が自分の保育実践は特にセクシズム解消に役立っている、役立てようとは考えていないということに通じるものである。このことも、セクシズムに対する意識の低さを意味していると考えられる。

表11:「あなたの保育は性差別解消のために役立っていると思いますか」

役立っている	役立っていない	合計
24.0(33)	76.0(104)	100.0(137)

学校は、その人の属性がどうであれ、その能力に応じた報酬を与える業績主義的な場であると同時に、属性に応じた役割取得の場である。今日の日本において制度上の属性主義は、ほとんど解消されているといえる。しかし、現在幼稚園をはじめとする学校内部の性役割化は、そのようなフォーマルな側面よりインフォーマルな側面における隠れたカリキュラムとしてその効力を発揮している。法制度やフォーマル・カリキュラムの整備が行われたからといって学校内部から属性主義が消えるわけではない。暗黙の内に行われる性役割社会化、すなわち隠れたカリキュラムを通じた性役割の社会化の特徴的なものの一つを、男女別の整列の仕方に見ることができる。

学校における男女別の整列は、性に基づくカテゴリーの存在を可視化する機能を有する。男女別の整列に関す

る教師の意識を調査することにより、学校教育に内在する隠れたカリキュラムを通じた性役割の社会化を、顕かにすることができるのではないだろうか。自らが求める教師としての理想と現実態度には隔たりがあるのではないかと考えられる。ここに保育における教師の意識の理想と現実との乖離の発端をみることができる。

具体的には「A幼稚園では日々の保育において男の子と女の子の別々に整列させています。あなたは保育者としてどの程度共感できますか」という質問を実施した。回答の結果は以下の通りであった(表12)。

表12: 男女別整列についての共感度

共感できない	どちらでもない	共感できる	合計
11.7(16)	30.7(42)	57.6(79)	100.0(137)

※「A幼稚園では日々の保育において男の子と女の子の別々に整列させています。あなたは保育者としてどの程度共感できますか」

共感できないと回答したものは11.7%である。共感できると回答するものが57.6%と過半数を超えており、どちらでもないと回答したものを含め男女別の整列を問題視していない教師が大半であることがわかる。このことは、ストラテジーとして男女を区別することを是認していることになる。

男女別に整列させることについての必然性に関しては、男女の特性は異なり、区別も容易である(クラス運営が容易である)という理由から必要であると回答するものが59.1%である(表13)。男女で区別する必要性を感じないと回答するものは36.5%である。どちらでもないというものを含め、男女別の整列を必然性がないと否定的に捉えていないものは63.5%になる。男女別の整列の共感度と必然性の関係をみると、共感できるといものは男女の特性は異なり、区別もしやすいから必要と考えており、共感できないものは男女で区別する必要性を感じないと回答している(表14)。男女で区別する必要性を感じないというものの多くは、男女別の整列に関して共感できないという否定的態度より、どちらでもないという問題視しない態度を取っているものの方が、多数であることに注意を要するのではないだろうか。このことから男女の特性は異なり、区別も容易であるという理由から男女別の整列を肯定的に捉える傾向が、幼稚園教師にはあると考えられる。幼稚園教師の多くが、男女の特性は異なるので男女別の整列は、ある程度必要であると考えているのである。

男女別の整列で育ってきたと思われる現在の幼稚園の教師の多くにとっては、男女別の整列は当然のものとして存在するのであり、大方においてこのことを受け入れている。このことは同時に教師が、時として「男の子」と「女の子」を公然と区別しているということの意味している。また教師は、スムーズな学級運営のストラテジーとしてジェンダーを用いているということの意味するものである。

園児や児童を統制する手段として、幼稚園や小学校で用いられる、男女別の整列に代表されるような性別カテゴリーは、集団を区分するという本来の目的とは別に「性は区分されるものである」というリアリティを内面化させる機能をもつのである。このような性別カテゴリーは、「性」以外のカテゴリーを集団区分の基準にしてもよい場面においてもきわめて頻繁に使われており、性役割の社会化の一端を担っていることが明らかになっている<sup>(6)</sup>。

ジェンダーの再生産をもたらす要因は保育の場面において、往々にして自明なものと思なされている。特に保育に携わる教師は、違和感なくこれらの要因を受け止めるかもしれない。問題性に気づかないことが多いのではないだろうか。

表13: 男女別整列についての必然性

I	II	III	合計
59.1(81)	4.4(6)	36.5(46)	100.0(137)

※I 男女の特性は異なり、区別もしやすいから必要  
 II どちらでもない  
 III 男女で区別する必要性を感じない

表14: 男女別整列についての共感度と必然性の関連性

	I	II	III	合計
共感できない	0.0(0)	0.0(0)	11.9(16)	11.9(16)
どちらでもない	7.4(10)	0.0(0)	22.2(30)	29.6(40)
共感できる	52.6(71)	4.4(6)	1.5(2)	58.5(79)

※I 男女の特性は異なり、区別もしやすいから必要  
 II どちらでもない  
 III 男女で区別する必要性を感じない

以上のことをふまえ幼稚園の現場をみると、幼稚園教師の多くがセクシズムに関して漠然と否定的な感情を有してはいるが、あたりまえという背後に隠れた問題の重要性まで認識するにいたっていないと考えられる。ジェンダーという概念についても、正確に把握しているものは少数であると考えられる。教師の有している児童中心主義のイデオロギーと実際の保育は、必ずしも男女別の整列に代表されるような事例において、合致していないと考えられる。求められる教師としてのリテラシーと現実の姿には隔たりがあるのである。特に教師の意識において乖離がみられる。このような傾向は、教師一般にみられるものなのであろうか。それとも特定の教師にのみあてはまる傾向であらうか。以下は、その尺度として性役割観尺度を用いてその傾向を検証してみる。

### 3) 性役割観尺度

長い間業績主義が支配する場とみなされてきた学校もまた、「性」という属性に基づく非対称的な知識が伝達される場であり、様々な性役割の社会化プロセスが進行する場であるという指摘がある<sup>(7)</sup>。その重要な役割を教師が果たしていることは自明であり、それ故、教師の性

役割観に着目することは有意味である。

教師が内面化していると思われる性役割観を、公的および私的領域における男女の役割分担についての一般認識を尋ねる五つの質問項目を合成して作成した質問紙を用いて尺度化した<sup>(8)</sup>。

具体的には「家族の重要な決定は最終的には夫がするほうがよい」「妻が外で働き、夫が家事・育児を行う夫婦が増えてもよい」「実力が同じでも、女性より男性のほうが上役に向いている」「今まで男性に向くといわれた職業でも、女性はどんどん進出したほうがよい」等の質問に「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらでもない」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の選択肢を設け、各選択肢に得点を付した。

以上の尺度を用いて有効回答者137人の性役割観スコアを算出し、伝統的な性役割観を内面化しているものと反対に流動的な性役割観を内面化しているものに分類した。伝統的な性役割観を内面化するもの（以下、「伝統的」）とは、男性には公的領域における職業達成を期待し、女性には私的領域における母役割・妻役割を期待する傾向の高いものである。流動的な性役割観を内面化するもの（以下、「流動的」）とは、逆にその傾向の低いものである。その結果は表15の通りである。

表15: 性役割観尺度による分類

伝統的	63.5 (87)
流動的	36.5 (50)

※伝統的性役割得点: 10～-2

男性には公的領域における職業達成を期待し、女性には私的領域における母役割・妻役割を期待する傾向の高いもの

※流動的性役割得点: -3～-9

男性には公的領域における職業達成を期待し、女性には私的領域における母役割・妻役割を期待する傾向の低いもの

#### ①回答者の属性と性役割観尺度の関連

性役割観尺度と年齢の間には、年齢が高いほうが伝統的な性役割観を内面化しているものが多いという傾向がみられる（表16）。これは年齢が高い方が旧来の厳しいしつけ等を受け、伝統的な性役割観を内面化する可能性が高いということが要因としてあげられる。ただ40歳代に関しては例外である。これは40歳代という年齢が、結婚・出産を経ても職業継続を希望するという流動的な性役割観を有したものの存在が反映されやすいからだと推測される。性役割観尺度と保育年数との関係においても、保育年数が20年以上25年未満を除き、同様に保育年数が長いほうが、年齢の高いものの割合が増加するために伝統的な性役割観を内面化しているものが多いという傾向がみられる。年齢と保育年数は多くの場合、正比例的に増加していく関係にあるのでこのことはある程度理解できることである（表17）。保育年数が20年以上25年未満が例外的であるのは、性役割観尺度と年齢の関係の40歳代と同様に、結婚・出産を経ても職業継続を希望すると

いう流動的性役割観を有したものの存在が結果に反映すると考えられる。同様に伝統的性役割観を内面化しているものに関しても、育児が一段楽し、再就職しているものの存在が考えられる。

表16：性役割観尺度と年齢のクロス表

	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
伝統的	55.2(48)	23.0(20)	3.4(3)	11.5(10)	6.9(6)	100.0(87)
流動的	52.0(26)	8.0(4)	30.0(15)	10.0(5)	0.0(0)	100.0(50)

表17：性役割観尺度と保育年数のクロス表

	5年未満	10年未満	15年未満	20年未満	25年未満	30年未満	30年以上
伝統的	50.6(44)	18.5(16)	5.7(5)	4.6(4)	9.2(8)	5.7(5)	5.7(5)
流動的	42.0(21)	32.0(16)	10.0(5)	4.0(2)	12.0(6)	0.0(0)	0.0(0)

## ②児童中心主義と性役割観尺度の関連

「保育中、男の子と女の子で接し方を変えることがありますか」という質問に対する性役割観尺度別回答を示したものが表18である。伝統的性役割観を内面化しているものでは66.7%の教師が男女で接し方を変えることはないと答え、流動的性役割観を内面化しているものでも56.0%が男女による接し方の変化はないと答えている。

『「男の子らしさ」「女の子らしさ」というものがあると思いますか』という設問に対する「ある」という回答は伝統的性役割観を内面化しているものが82.8%と、流動的性役割観を内面化しているものの78.0%を上回っている(表19)。

性差による接し方の変化と男女間の特性観を総合すると、幼稚園教師の多くは「男の子」と「女の子」の特性の違いを認めており、そのことを保育においては利用していないと意識しているといえる。

性役割観尺度に着目をして詳細をみると、伝統的性役割観を内面化しているものは「男の子らしさ」「女の子らしさ」という文化的・社会的性差は存在するが、実際の保育の場では区別をしていないという意識を有している。反対に流動的性役割観を内面化しているものは、「男の子らしさ」「女の子らしさ」という文化的・社会的性差に対しては伝統的性役割観を内面化しているものよりも否定的であるが、実際の保育の場では、男女による接し方の変化が実際には存在するという点について伝統的性役割観を内面化しているものよりも認識が高い。セクシズム解消という立場からすれば、実際の保育の場で性差により、接し方を変えていないならば問題はないが、変えていてそのことを認識していないのであれば、男女間の特性を認識しながらも接し方を変えていないという伝統的性役割観を内面化しているものの方が問題を含んでいることになる。

このことを明確にするために「セクシャリティ」「ジェンダー」という概念に関する性役割観尺度別の回答に着目する。

表18：性役割観尺度と性差による接し方の変化のクロス表

	ある	ない	合計
伝統的	33.3(29)	66.7(58)	100.0(87)
流動的	44.0(22)	56.0(28)	100.0(50)

※「保育中、男の子と女の子で接し方を変えることがありますか」

表19：性役割観尺度と男女間の特性観のクロス表

	ある	ない	合計
伝統的	82.8(72)	17.2(15)	100.0(87)
流動的	78.0(39)	22.0(11)	100.0(50)

※『「男の子らしさ」「女の子らしさ」というものがあると思いますか』

「セクシャリティ」に関しては伝統的性役割観を内面化しているものが77.0%、流動的性役割観を内面化しているものが88.0%と共に高い割合で聞いたことがあると認知度の高さを示している(表20)。

「ジェンダー」という概念に関しては伝統的性役割観を内面化しているものは42.5%、流動的性役割観を内面化しているものは56.0%が聞いたことがあるとしている(表21)。

「ジェンダー」の概念規定について正しく理解しているものは伝統的性役割観を内面化しているもので3.4%、流動的性役割観を内面化しているもので10.0%であった(表22)。

表20～22までの項目に関してはいずれも伝統的性役割観を内面化しているものより、流動的性役割観を内面化しているものの方が高い割合を示している。このことは流動的性役割観を内面化しているものの方が「セクシャリティ」や「ジェンダー」に関しては正確な概念規定を有しているということを示すものである。「セクシャリティ」や「ジェンダー」に対して敏感であるといえるであろう。

表20：性役割観尺度とセクシャリティ認知に関するクロス表

	ある	ない	合計
伝統的	77.0(67)	23.0(20)	100.0(87)
流動的	88.0(44)	12.0(6)	100.0(50)

※「セクシャリティという言葉聞いたことがありますか」

表21：性役割観尺度とジェンダー認知に関するクロス表

	ある	ない	合計
伝統的	42.5(37)	57.5(50)	100.0(87)
流動的	56.0(28)	44.0(22)	100.0(50)

※「ジェンダーという言葉聞いたことがありますか」

表22：性役割観尺度とジェンダーの概念規定のクロス表

	正しく理解	間違っ理解	わからない	合計
伝統的	3.4(3)	9.2(8)	87.4(76)	100.0(87)
流動的	10.0(5)	8.0(4)	82.0(41)	100.0(50)

※「ジェンダーの意味を説明してください」

またセクシズムに関する意識についても同様である。「今の社会に性差別はありますか」という問いに関しては伝統的性役割観を内面化しているものでは77.0%が、流動的では84.0%が現行の社会には性差別が存在していると感じている(表23)。セクシズムに対する問題意識も流動的性役割観を内面化しているものの方が高く、進歩的であると思われる。このことは伝統的性役割観と流動的性役割観の概念規定と一致するものである。

「あなたの保育は性差別解消のために役立っていると思いますか」という設問に対して役立っていると回答したものは伝統的性役割観を内面化しているものでは26.4%、流動的性役割観を内面化しているものでは20.0%と、伝統的性役割観を内面化しているものの方が高い割合を示している(表24)。流動的性役割観を内面化しているものはセクシズムに対する問題意識が高いため、それを解消することの難しさも理解しており、自分の保育がどの程度役に立っているのか疑問視していることが、この結果に反映されていると考えられる。

表23: 性役割観尺度とセクシズム認知のクロス表

	ある	ない	合計
伝統的	77.0(67)	23.0(20)	100.0(87)
流動的	84.0(42)	16.0(8)	100.0(50)

※「今の社会に性差別はありますか」

表24: 性役割観尺度とセクシズム解消の保育実践のクロス表

	役立っている	役立っていない	合計
伝統的	26.4(23)	73.6(64)	100.0(87)
流動的	20.0(10)	80.0(40)	100.0(50)

※「あなたの保育は性差別解消のために役立っていると思いますか」

概して幼稚園教師の大半は、「セクシャリティ」と「ジェンダー」の明確な違いを認識していない。しかし漠然と学校教育内にセクシズムは存在し、そのことに対しては否定的な態度を有していることが分かるのである。特に伝統的性役割観を内面化しているものの方が、男女間の特性は異なるということを意識しながらも接し方を変えていないという意識を有している点、自らの保育がセクシズム解消に役立っていると誤認している点から多くの問題を含んでいると考えられる。

### ③男女別の整列に関する共感度と必然性と性役割観尺度の関連

この点についての回答結果は表25に示す通りである。男女別の整列の共感度については、伝統的性役割観を内面化しているものは共感度が高いという傾向があり、反対に共感できないという傾向は低い。また流動的性役割観を内面化しているものは、どちらでもないというものが多く傾向にあるが、共感できるというものも少なくないという点に着目を要する。男女別に整列させることに

ついての必然性に関しては、伝統的性役割観を内面化しているものは男女の特性は異なり、区別も容易である(クラス運営が容易である)という理由から必要であるという傾向がみられる。反対に流動的性役割観を内面化しているものは男女で区別する必要性を感じないと回答するものが多いという傾向がみられるが、男女の特性は異なり、区別も容易であるという理由から男女別の整列を肯定的に捉える傾向もある。幼稚園教師の多くが男女の特性は異なるので男女別の整列は、ある程度必要であると考えている。その傾向は伝統的性役割観を内面化しているものに高くみられるが、流動的性役割観を内面化しているものにもその傾向が同様にあるといえる。

以上の結果を総合すると、児童中心主義という教師の理想的なイデオロギーと、実際の保育の内容との間に乖離が生じていることが分かる。セクシズムに関して検証をしてきた本研究の結果からは「ジェンダー」と「セクシャリティ」の概念規定が明確になされていないため、何をセクシズム解消のために行わなければならないか教師が認識できていないのではないかと考えられる。セクシズムを否定はするが、現実の保育ではそのような指導を行っていないのである。性別カテゴリーを保育の現場に用いているのである。

幼稚園教師の多くがセクシズムに関して漠然と否定的な感情を有しているが、あたりまえという背後に隠れた問題の重要性まで認識するにいたっていないと考えられる。ジェンダーという概念についても正確に把握しているものは少数であった。求められる教師としてのリテラシーと現実には隔りがあるのではないかと考えられる。そしてその隔りとは、伝統的性役割観を内面化したものと、流動的性役割観を内面化したものの間では、伝統的性役割観を内面化したものの隔りの方が大きいようである。伝統的性役割観を内面化しているものは、「ジェンダー」「セクシャリティ」「セクシズム」に関して流動的性役割観を内面化しているものに比して、敏感でなく、進歩的な考え方という点においても遅れていると考えられる。

表25: 性役割観尺度と男女別整列についての共感度と必然性の関連性

		I	II	III	合計
伝統的	共感できない	0.0(0)	0.0(0)	4.6(4)	4.6(4)
	どちらでもない	4.6(4)	0.0(0)	18.4(16)	23.0(20)
	共感できる	65.5(57)	4.6(4)	2.3(2)	72.4(63)
流動的	共感できない	0.0(0)	0.0(0)	24.0(12)	24.0(12)
	どちらでもない	12.0(6)	0.0(0)	28.0(14)	40.0(20)
	共感できる	32.0(16)	4.0(2)	0.0(0)	36.0(18)

※「A幼稚園では日々の保育において男の子と女の子の別々に整列させています。あなたは保育者としてどの程度共感できますか。」

※I 男女の特性は異なり、区別もしやすいから必要

II どちらでもない

III 男女で区別する必要性を感じない



## V まとめ

本研究の結果から幼稚園教師の教育観としての児童中心主義のイデオロギーと、教育方法上のストラテジーとの間には乖離が生じていると考えられる。

学校教育の現場において、教師は男女平等主義という児童中心主義と、課題達成のための教室統制（ストラテジー）との間を揺れ動いているのである。幼稚園をはじめとする学校組織は、このようなジレンマを保育者・教師に強い組織なのではないだろうか。幼稚園教師にとってこの種の問題の解決は、学校組織に基盤をもたない別の枠組みに依拠するしかないのである。その意味でジェンダーはとりわけ有効な枠組みとなる。児童中心主義とストラテジーというそもそも相容れない要請を統合するためにジェンダーが用いられている。

ジェンダーがジレンマ解決に用いられる理由は、その自然さにあると考えられる。自然という意味は、ジェンダーは自然な発達過程を経れば、当然子どもに認知される性別カテゴリーであるということ。また、家族を通して子どもたちに蓄積されているであろうはずの、という意味で自然である利用可能な日常知識としての性別ステレオタイプでもあるということを示すものである。教師がジェンダーを教授行為の中で用いるのは、それがあくまで子どもにとって自然だという認識を有しているからである。しかし、実際のところ子どもにとって自然であるかどうかの確認は行われていない。一方、子どもは、教師に従うために教師が自然であると思う基準であるジェンダーを、教師の発する解釈コードとして自分の中に構築せざるを得ないのではないだろうか。

教師と子どもの双方にとって、関心の中心は両者の相互作用を継続することにあるのであって、ジェンダーはそのための道具として有用なのである。ジェンダーは、教室秩序や相互作用を取りつけながら教育目標を達成するための手段であっても目的ではないのである。

以上のように、幼稚園におけるジェンダーの再生産は保育者の側に存在する目的達成と、子どもが有している利用可能な日常知識としてのジェンダーとの結合過程と捉えることができる。ジェンダーの再生産は、教師にとって子どもとの相互作用を維持しながら当面の目的を達成するための手段として用いられている。そして自然なものの故に意識されにくいと考えられるのである。

このような過程は、隠れたカリキュラムとして教師にも子どもにも見えないところで行われているものである。隠れたカリキュラムとは主として学校において、表立っては語られることなく、暗黙の了解の下で潜在的に教師から生徒へ伝達されるところの規範、価値、信念の体系である<sup>(9)</sup>。天野は隠れたカリキュラムのことを隠された領域の持続と呼び、性による不平等生成の隠されたメカニズムを早急に解明することが重要であると指摘する<sup>(10)</sup>。

学校教育の理念は、そして多くの教師の実践は、やはりあくまで児童中心主義であり、男性女性に関係ない平等主義である。にもかかわらず、男女というジェンダーの存在は、教師にとっても子どもにとってもあたりまえであるかのように問題にされない。このことに目を向けられる、具体的にいうならばジェンダーにセンシティブな教師の存在が今後不可欠になると考えられる。教師が、性別を使い分ける必然性のない場面において性別カテゴリーを多用している事実とともに、教師にとって性別カテゴリーは自然な枠組みであり、教師自身には、性役割の社会化の意図なく、集団統制上の便宜性故に中立的なカテゴリーとして性を使用していることが問題となる。そして教師はそのことによって、性によらぬ同一処遇や一人一人の個性を大切にす児童中心主義という基本原則をおかすことにはならないと自認していることが問題となる。教師のこうした中立的な立場からの、もしくは無意識のうちの性別カテゴリーの多用について今後、更なる研究が必要となると思われる。今回はサンプル数が少ないということ、地域性が限定されていたということ、また学校法人立の幼稚園教諭対象の調査であったので、今後はこれらの問題を解消するような方向性で研究を進めて行くことが求められる。

## 註

- (1) 文部省、『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、1999年、p.169.
- (2) 同上、p.31.
- (3) 中西祐子・堀健志、『「ジェンダーと教育」研究の動向と課題—教育社会学・ジェンダー・フェミニズム』日本教育社会学会編『教育社会学研究』第61集、東洋館出版社、1997年、pp.77-99.
- (4) 森繁男『性役割の学習としつけ行為』柴野昌山編『しつけの社会学』世界思想社所収、1998年、p.163.
- (5) マネー・J 著／朝山春江・朝山耿吉訳『ラブ・アンド・ラブシックス』人文書院、1987年、Money, J., Sex Errors of the body, Johns Hopkins University Press, 1968, pp.221-223.
- (6) 森、前掲書、pp.163-168.
- (7) 中西祐子、『ジェンダー・トラック』東洋館出版、1998年、p.43.
- (8) 同上、pp.54-56.
- (9) 柴野昌山『社会化と社会統制』柴野昌山他編『教育社会学』有斐閣、1992年、p.61.
- (10) 天野正子、『性と教育』研究の現代的課題—かくされた『領域』の持続—『社会学評論』第39巻3号、1988年、p.266.

(2001.7.31 受稿, 2001.9.17 受理)